

『西国立志編』はどのようにして 明治初期の社会に広がったのか

社会環境科学研究科 国際社会環境学専攻

三 川 智 央

How Did “Saigoku Risshihen” Become Popular in Early Meiji Society?

MIKAWA Tomohisa

Abstract

“Saigoku Risshihen” published from 1870 to 1871 in Japan is Nakamura Masanao’s translation of “Self-Help” written by an English author, Samuel Smiles. Although it is considered as a best-selling book of Meiji era, neither the publication of the book nor the situation of circulation are clear. In this paper, I researched the publication of “Saigoku Risshihen” and the situation of circulation, and made it clear that how this book became popular in early Meiji society. Moreover, I clarified the reason why the popularity of this book faded in the middle period of Meiji.

Key Words

Meiji, Saigoku Risshihen, Self-Help

1

明治三年から四年にかけて刊行された『西国立志編』は、イギリスの著述家サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の著書 *Self-Help* を、中村正直が留学先のイギリスから日本に持ち帰り¹⁾ 翻訳したものであるが、「日本の人口がまだ三千万」であった時代であって、「出版部数は明治末年までに百万部に達した」と言われ、「明治時代を通して最大のベストセラー」と評される²⁾。しかし、多くの人々が明治の大ベストセラーとして認める書物でありながら、その出版や流通の具体的な状況については、はっきりしない部分が多い。

例えば、現在では定説となった感のある「百万部」と言われる出版部数³⁾ について見ても、その根拠は明確であるとは言い難い。おそらくこの数字は、もとは、明治四十年に刊行された石井研堂著『自助的人物典型中村正直伝』の中に、「先生、『立志編』に次で、『自由之理』、『西洋品行論』等

を続刊す。(中略) 亦社会の歓迎する所と為り、売れ行き前書に譲らず、都て数十万冊を発行せり。(中略) 先生、東京に移りて後も、三書の発行数は、毫も衰へず」とある⁴⁾ のに端を発し、その後、柳田泉が昭和十三年刊行の富山房版『西国立志編』に「解説」を書いた際に、「『立志編』の初刊も木版半紙本十三編であつたが、それでさへ数十万冊を発行したろうといふから、その後の活版や異版を加へると恐らく百万を突破してゐるであらうと思はれる」とした⁵⁾ のが、現在の「百万部」神話に繋がったのではないかと思われる。

ただ、『西国立志編』が明治末年に至るまで様々な形で版を重ね続けていたことは、現存する多くの書誌が証明しているところであり、確かに「百万部」という数字も頷けないわけではない。しかし、こうした数字だけが独り歩きし、「明治時代を通して最大のベストセラー」と銘打たれることによって、逆に、実際の『西国立志編』の姿が見えにくくなってしまっていることも確かである。

はたして、『西国立志編』の発行は、明治年間を通してそれほど順調であったのだろうか。また、『西国立志編』をめぐる社会の状況も、変化することはなかったのだろうか。

ここに、明治二十七年刊行の博文館蔵版『改正西国立志編』の巻頭に記された「改正西国立志編刊行二就テ」と題する一文⁶⁾がある。一部を引用する。

維新以来刊行ノ図書十数万種ニ下ラズ。而シテ其ノ発刊部数ノ最モ多キヲ故中村正直先生ノ西国立志編。及ヒ福澤諭吉先生ノ西洋事情。故内田正雄先生ノ輿地誌略トス。三書共ニ発売ノ部数各々数十万冊ニ上リ。明治ノ三大出版トシテ今尚ホ書林社会ニ伝唱セラル。(中略)然ルニ本書ノ版權ハ固ト数名ノ共有ニ属シ。発行者中不幸ニシテ既ニ閉業シタルモアリ。為メニ久シク刊行ヲ中絶シ。今ヤ市上殆ント一本ヲ残サスレハ江湖諸君子ノ切ニ遺憾トセラル、所。(中略)今先生没後本書ノ斯ノ如キヲ見テ嘆惜ニ耐エズ。今回其ノ版權ヲ譲受ケテ茲ニ其ノ刊行ヲ継続スルニ方リ。先生ノ肖像ト自叙伝千字文トヲ巻首ニ掲ケ。用紙ヲ選ミ印刷ヲ鮮明ニシ。且ツ其ノ一般ニ普及センヲを計リ。価格ヲ発行実費ニ改正セリ。蓋シ聊カ師恩ノ万一ヲ報復センヲ期スルノミ。

この文章を読むと、博文館蔵版が刊行された明治二十年代の半ば頃には、『西国立志編』の刊行は長く途絶えたまま流通もほとんどなくなり、「数十万冊」という売り上げも書林社会に伝わる過去の伝説と化してしまっていた様子が伝わってくる。この時期、『西国立志編』は、同時代的な意味でのベストセラーの座からは、明らかに退いていたのである。刊行から二十年以上が経過して、時代が変わったからだと言えはそれまでだが、その「時代の変化」とは具体的にはどのようなものだったのか。

本稿では、『西国立志編』がどのようにして明

治初期の社会に広がったのかを、出版や流通の状況に着目しつつ明らかにした上で、その広がりが明治二十年代の半ばに弱りを見せていることに注目して、その理由を考えてみたい。『西国立志編』という書物の出版・流通をたどることで、明治初期の社会の一面に迫ることができればと思う。

2

まずは、『西国立志編』の刊行についてだが、この点については、すでに大久保利謙が、静嘉堂文庫蔵の訳稿本、および早稲田大学蔵の初刊本を材料として詳細な調査を行っている⁷⁾。その調査結果によると、①訳業は、明治三年の二月頃から十一月初旬にかけて行われたらしいこと、②初刊においては、全十三編十一冊が同時に刊行されたのではなく、第一・二冊、第三・四冊、第五・六冊、第七・八冊、第九・十・十一冊というように、五回に分けて刊行され、袋入りで発売されたこと、③袋の表には、第一から第四の袋には「明治庚午十一月新刻」(「明治庚午」は明治三年)、第五の袋には「明治四年辛未七月刻」とあること、④早稲田大学蔵本には、第一冊、第三冊、第五冊、第七冊、第九冊の各扉の隅に、旧蔵者が書き込んだ購入の日付(第一冊「明治四辛未年三月六日一二之冊求之」、第三冊「明治四辛未年四月十五日三四之冊求之」、第五冊「明治四年辛未五月六日五六之冊求之」、第七冊「明治四辛未年六月十日七八之冊求之」、第九冊「明治四辛未年十月十七日九十十一之冊求之」)が残されていることが明らかにされている。

初刊本第一冊の扉には「明治庚午初冬新刻」とあり、これだけを見ると、あたかも明治三年の十月に全部が刊行されたかのように思われるが、大久保の調査を踏まえれば、①実際の刊行開始は、明治三年十一月から明治四年の三月六日までの間であったこと、②第九・十・十一冊は明治四年七月以降の刊行であり、明治四年十月十七日までには全十一冊がすべて刊行されていたことがわかる。ただし、大久保は言及していないが、管見によれ

ば、静岡県立中央図書館の葵文庫には、第二冊の奥付に「明治三庚午年十二月／同人社蔵版」と記された刊本があり⁸⁾、これが最も早い刊行時期を記録したものとすれば、少なくとも第一・二冊は明治三年の末に刊行されたと考えられる。

次に版元についてだが、大久保は、先程の調査の中で、早稲田大学蔵本の奥付に「書肆」として「東京／日本橋一丁目 須原屋茂兵衛／芝神明前岡田屋嘉七／浅草茅町貳丁目 須原屋伊八／小石川伝通院前 雁金屋清吉／大伝馬町三丁目 袋屋亀次郎／静岡／江川町 本屋市蔵／七間町三丁目 須原屋善蔵」とあるのを取り上げ、「この初刷本には東京と静岡の書林が名をつらねているが、主として刷立などに当った版元は静岡の本屋市蔵らしい。この本屋市蔵がいかなる書林か判然としなが、この奥付の本屋市蔵のところに『駿州静岡／通江川町／本屋市蔵／発兌之記』という角朱印が捺してあるのでかく推定される」とする⁹⁾。ちなみに、静岡県立中央図書館葵文庫蔵本の奥付には、「明治三庚午年十二月／同人社蔵版」と記された後に、「製本売捌処」として「静岡 江川町 本屋市蔵／同 七間町三丁目 須原屋善蔵」と記されており¹⁰⁾、両者は早稲田大学蔵本のものと同重なる。また、同じく初刊本と思われる架蔵本¹¹⁾には、第二冊、第八冊、十一冊の奥付に、「弘通書房」として「静岡江川町 廣瀬市蔵／東京大伝馬町三丁目 東生亀次郎」と記されている（第四冊、第六冊の奥付は、大久保が調査した早稲田大学蔵本と同じ）。廣瀬市蔵は本屋市蔵、東生亀次郎は袋屋亀次郎のことであろう。他と異なるこの奥付が、どのような経緯で付けられたのかはわからないが、とにかく、『西国立志編』の初刊本の刊行には、静岡江川町の本屋市蔵と廣瀬市蔵が一貫して関わっていたことは確かである。

大久保の調査では、「この本屋市蔵がいかなる書林か判然しない」とされていたが、ある史料から、この人物が駿府学問所（後の静岡学問所）御用の版元であったことがわかった。その史料というのは、『駿藩役名便覧』¹²⁾というもので、駿府藩の各役職にあった人物の名字が一覧となって記載

されている。「明治二巳年正月新刻」と記されていることから、駿府藩が形作られて間もなく作成されたものであることがわかる。この便覧には、学問所の一等教授として中村敬助（正直）の名前も確認できるのだが、その奥付にあたる部分に「学問所御用製本所」として「駿府江川町／板元 本屋市蔵／彫工 成文堂」とあるのだ。

そもそも、『西国立志編』の刊行は、中村が幕府倒壊によって留学先のイギリスから急遽帰国した後、新政府から駿府城主として七十万石を与えられた徳川家達に従って移住した静岡の地で、静岡藩（駿府藩は明治二年に静岡藩と改称）の人々の協力を得てなされた。初刊本の扉に、「駿河国静岡藩 木平謙一郎蔵版」と明記されているのも、そのためである。『西国立志編』の刊行までの経緯を、石井の前掲書は次のように記述している¹³⁾。

当時、先生力微にして、之を刊行するに由無く、執政大久保一翁氏に諮れり。一翁氏は、予てより仄に知れることなりしかば、此の書一たび世に出つれば、風教に裨益すること少からずと為し、藩金若干を投して、刊行の拳を助けたり。（中略）藩校の事務員木平氏は、書林との交渉其他外交方面の庶務を担当し、令夫人内に在りて家政を管理せられたるとに因りて、其の業大に進みしといふ。同書に、静岡藩木平謙一郎蔵板の題記あるは、これが為めなり。

ここに登場する大久保一翁は、大久保忠寛のことであり、先程の『駿藩役名便覧』には「御中老同様御用扱 三郎父隠居」として掲載されている。「奥詰」の中に「大久保三郎」という名前が見えるので、形の上では息子に家督を譲って隠居の身となりながらも、実質的には藩の重鎮として政務を執っていたということであろう。また、木平謙一郎については、『駿藩役名便覧』で確認することはできなかったが、前出の調査の中で大久保は、「恐らく幕臣で徳川家に従って静岡へ来た一人、静岡藩庁の名簿によると、当時は学問所組頭とあ

る。つまり藩校の事務局長でかかる関係からこの出版の世話をやき、蔵版者となったのであろう」と述べている¹⁴⁾。

以上のことを総合すると、『西国立志編』は、当初、学問所と関係の深かった静岡の版元・本屋(廣瀬)市蔵のもとで刷られ、静岡で製本・販売が開始されたとみてよいだろう。しかし、かなり売れ行きがよかったものと見え、販売網は間もなく東京にも広がり、初刊本においては、少なくとも五つの書肆が東京での販売を行うことになったものとみられる。

『西国立志編』の売れ行きについては、石井の前掲書の中に次のようにある¹⁵⁾。

本書の売れ行きの、如何に好かりしやは、左の二三事にて之を証し得べし。即ち、出版部には、摺師製本師等、無慮百人余、常に夜を日に継ぎて供給すれども、需要者朝夕門に満ちて、催促の声喧嘩を極め、僅に所望数の半を得るを以て幸となすに至る。是に於て、自然の勢として、市価騰貴し、出版部にて売り出す価の幾割高にて、取引せらるゝに至る。これ出版界未だ曾て聞かざる所なり。或る書估の如きは、為めに思はざる奇利を博し、喜びの余り、本書を神棚に飾り、燈火を供して、其の大恩を拝謝したりしといふ。

3

その後、明治五年の夏に中村は東京に移り、翌明治六年二月、家塾・同人社を開設した¹⁶⁾が、おそらくこの頃から、同人社蔵版が刊行され始める。葵文庫蔵本にも、奥付に「同人社蔵版」とあったが、これはそれとは違い、初刊本(この後は「同人社蔵版」と区別して「静岡版」と呼ぶことにする)の版木を用いながらも、それとは異なるいくつかの特徴を持っている。まず一つ目には、奥付の「同人社蔵版」の下に、「同人社／維記」の角朱印が押されていること。二つ目には、第一冊の扉の右側、つまり表紙裏に、「明治四年辛未七月

新刻」とある静岡版の袋をそのまま印刷してあること。そして三つ目に、奥付に掲載された書肆名から、静岡版の版元であった本屋(廣瀬)市蔵を含む静岡の書肆名が消え、すべてが大阪と東京の書肆ばかりになっていることが挙げられる。つまり、同人社蔵版では、印刷・製本が静岡を離れて東京に移されるとともに、販売網も東京だけでなく大阪まで拡大していったことがわかる。

しかし、『西国立志編』がここまで順調に販売網を広げることができたのはなぜだろうか、いや、販売網だけではない、当然、販売網の拡大には、発行部数の増大がともなっていたはずである。石井の前掲書から引用してみる¹⁷⁾。

初め、先生著訳書を刊行する、発行部数の多大なる、実に意想外に在り。従つて、出版費を償却して猶剰す所数万金に上る。是を以て塾生の未だ多からざるにも関せず、当時築地に居留したりし英国人薬剤師ポート氏、(後ち同人の弟を呼びよせて、代らしむ)を聘し、只、高給を払ふのみならず、住宅より賄費迄支弁して、優遇以て英語科を教授せしめ、読本・文典・地理・歴史等の諸科は、之を高足弟子に委し自ら高等英語の訳読、及び、作文の剛正に任ず。

中村が東京に移り同人社を開いた時点では、すでにJ・S・ミル(John Stuart Mill)の著書 *On Liberty* を彼が翻訳した『自由之理』も刊行されており¹⁸⁾、ここに記された「著訳書」は、必ずしも『西国立志編』だけを指すわけではないが、「出版費を償却して猶剰す所数万金」と言われる内の多くは、やはり『西国立志編』の売り上げによるものであったと考えて差し支えないだろう。『西国立志編』は、当時の社会にあって、それだけの読者を獲得していたのである。

『西国立志編』が刊行された頃の社会を、石井は、「時恰も、維新の大業やゝ緒に就き、人々西洋文明の真髓を咀嚼せんことを思ひ、読書欲の旺盛なる際なり」と記述している¹⁹⁾が、『西国立志

編』が多数の読者を獲得できたのも、まさに、「西洋文明の真髓を咀嚼せん」とする時代の要求にうまく合致したからだと言える。しかし、時代の要求という漠然としたもののほかに、もう一つ、見落としてはいけないことがある。それは、明治五年の学制発布と同時にスタートした、近代的な学校教育制度の中で、『西国立志編』が教科書として用いられたという事実である。

『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身(三)』の「修身教科書総解説」は、明治初年から十年頃までに刊行されていた修身教科書を通覧する中で『西国立志編』に触れ、次のように述べる²⁰⁾。

また偉人の業績や道徳に結びついた実話・伝記などを集めた原典を翻訳した修身教科書がある。これらを代表するものは、当時の名著として普及した中村正直訳のスマイルスの原典による『西国立志篇』、続いて刊行したバルベル原著の『西国童子鑑』、スマイルスによる『西洋品行論』などがある。これらに類するもので東洋の列女伝に見合うものを西洋の実話によって編集した英人スターリング原典で宮嶋嘉国訳の『西洋列女伝』がある。これらのなかでは『西国立志篇』が最も普及した書であるので、これをもって実話による修身教科書を代表させることができる。

なお、この「修身教科書総解説」においては、具体的な史料として、学制発布後、各府県で定めた「小学教則」、および明治八年の『文部省第三年報・第一冊』の巻末に付けられた「小学書籍一覧表」を取り上げ、その内容を説明している。少し長くなるが、『西国立志編』に関係する部分を引用しておく²¹⁾。

当時の諸府県における小学教則を集めてこれを通覧すると、最も多く読物としてあげられている修身教科書は箕作麟祥の『勸善訓蒙』である。これを下等小学の上級、または上等小学の読物としてあげているものが少ない。

それ以外のものは指示されている例が少くなるが、下等小学の低学年用の読物として福澤諭吉の『童蒙教草』や渡邊温の『伊蘇普物語』があげられている。これらは内容が割合に平易であるので、場合によっては読物として用いられたのであろう。この他教則にあげられている修身教科書としては、阿部泰蔵の『修身論』、中村正直の『西国立志篇』、和田順吉の『勸懲雑話』などがある。(中略)

明治八年の『文部省第三年報・第一冊』の巻末に小学書籍一覧表がある。これは当時各府県の教則や教科書目などに掲げてあるものからとったものであって完全な教科書目録ではないが、小学校用書の概略がこれでわかる。この中で修身教科書として列挙されたものは、石井光致の『修身談』、阿部泰蔵の『修身論』、箕作麟祥の『勸善訓蒙』、永峯秀樹の『智氏家訓』、中村正直の『西国立志篇』、澤井莞平の『修身小学』、上羽勝衛の『勸孝選言』、福澤諭吉の『童蒙教草』である。この他に大阪府の『小学子弟心得草』、植村正直の『小学女児手引草』、福澤諭吉の『学問ノスゝメ』などが記されている。

「修身」は、「学制」の第二十七条に規定された、下等小学・上等小学で設けなければならない教科の一つであった。そして、いわゆる「学制序文」(明治五年七月「太政官布告二百十四号」)に明文化されたように、学制の基本方針が、従来の儒学を基本とした学問の弊風を改め、身を立てる基礎としての実学を尊重することであったことを考え合わせれば、この「修身」という教科が、実学尊重時代の新たな道徳教育を行うものとして設定されたことは明らかである。つまり、明治初年代においては、『西国立志編』は、一般の書籍としてだけではなく、明治政府によって打ち出された新たな教育制度のもと、実学尊重時代の道徳教育を担う教科書としても流通し、教育関係者や、学校に通う子どもたちの間に広がっていたということである。

なお、教科書として社会に流通するということ、当時の出版界においてどのような意味を持っていたのかという点についても、言及しておく必要があるだろう。国文学研究資料館編『明治の出版文化』所収の稲岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」は、「甲府の大書林内藤伝右衛門」に関する論考だが、その中に、明治六年の『甲府新聞』の記事をもとに述べた次のような一節がある²²⁾。

明治五年近代学校教育が開始されると、小学校の課業書は必須のものになった。これは出版者にとって全く新しいマーケットの創出を意味する。一大商機の出現である。内藤の場合、明治四、五年の日商は長唄浄瑠璃本が売筋で二十五銭から二円程度。それが小学課業書を扱うようになってからは、一日に百～二百円、六年八月中には三千四百余円にもなった。

教科書を扱うことで一挙に売り上げを伸ばした様子が手に取るようにわかる。そして、このような現象は、全国各地で生じていたものと考えられる。まさに、学制以降、教科書としての書籍の流通こそが、近代日本の出版および書籍販売に大きな変革をもたらしたのであり、明治初年代のベストセラーも、このような社会状況の中で出現したのである²³⁾。

4

ここまで、『西国立志編』が近代的学校教育制度の整備とともに、修身教科書として社会に広がっていった様子を明らかにした。だが、『西国立志編』が当時の日本の教育と深く結びついていたという意味では、学校教科書としての流通以上に注意しておかなければならないことがある。

『明治天皇紀』巻四十九には、明治六年のこととして、次のような記載がある²⁴⁾。

御講学の状は之れを詳かにする能はずと雖も、十月、宮内卿徳大寺実則・侍従長東久世通禧が聖徳涵養に関して内議せる際の文書に従来御実行の日課表を掲げたれば、之に由りて其の一斑を窺うことを得べし、即ち毎月一・六の日は休日、二・四・七・九の日は国史纂論の会読にして、美静・永孚奉仕し、三・五・八・十の日は西国立志編の会読にして、其の三・八の日には美静・弘之、五・十の日には弘之・永孚奉仕す

また、同じく巻五十四には、明治七年一月のこととして、

七日 御講書始、宮内省三等出仕福羽美静古事記を、同四等出仕加藤弘之西国立志編を、同五等出仕元田永孚帝鑑図説李泌優待の条を進講す、皇后同座あらせらる（中略）御講学の情況は詳かならざれども、概ね去歳に同じく、美静・弘之・永孚を召して国史纂論・西国立志編等を会読したまふ

との記載があり²⁵⁾、明治六年から七年にかけて、明治天皇の学問の中にも、『西国立志編』が取り入れられていたことがわかる。

そもそも明治天皇の学問は、維新当初は、漢学や国史を中心としたものであったが、明治三年の末に加藤弘之が侍読となった時から、「毎週二三回欧米の政体・制度及び歴史を進講」するようになり²⁶⁾、その後、明治四年八月には、さらに西周が侍読となり、「博物学・心理学・審美学・英米比較論」を進講する²⁷⁾。そして、明治五年正月七日の講書始では、元田永孚による『書経』堯典の第二章の進講とともに、加藤弘之による『国法汎論』の進講が行われることとなる²⁸⁾。この年の天皇の学問について、『明治天皇紀』巻四十四には、次のような記述がある²⁹⁾。

是の歳御講学の情況明かならずと雖も、時風洋学の行はるゝこと盛なるがため、経書の進

講は一時廃せられて専ら和漢の歴史・西洋翻訳書の類のみ用ゐらるゝこととなり、弘之は独逸国国法学者ブルンチリーの著を自ら抄訳して国法汎論と題せる書を進講し、又独逸語の御練習に奉仕す

明治五年になると、明治天皇の学問の中で、洋学の占める割合が非常に高くなっていたことがわかる。前にも言及したように、明治五年の学制の基本方針は、従来の儒学を基本とした学問の弊風を改めることにあった。そして、学制以降に実施された明治初年代の学校教育は洋学を基礎とし、多くの翻訳教科書を使用していた。つまり、明治天皇の学問の改革と、近代的学校教育の普及は、まったく同じ方向で結びついていたと言える。明治七年の講書始において、加藤弘之が『西国立志編』の進講を行った時、『西国立志編』は日本における近代的学問および教育の最良のテキストとしての権威を手に入れたのである。

『西国立志編』というテキストが、国家的な権威と結び付く形で、学校教育の中に広がっていったことは、いくつかの史料からうかがい知ることができる。

まず、『明治天皇紀』巻五十三には、明治六年十一月二十九日、皇后についての次のような記録がある³⁰⁾。

皇后、午前八時三十分御出門、開成学校に行啓あり、生徒修業の状を巡覧したまふの後、試験室に於ける各学科生徒の実験等を台覧、次に書器室・器械製作所を御巡覧、体操所に於て諸生徒の体操を覧たまひ、御少憩の後、十一時東京女学校に行啓、各生徒の修業、優等生の試業等を台覧あり、正午還啓あらせらる、是の日、両校優等生に賞品を賜ふ

この日、皇后から東京女学校の優等生に贈られた賞品が『西国立志編』であったことが、蘆谷蘆村著『穂積歌子』の中に記されている。

森有礼が文部卿になつて、日本の新しい教育制度は、始めて樹立されました。小学校や、師範学校も、各地に出来るやうになつたのですが、其の時に日本で始めての女学校が出来たのです。(中略)

翌る年、明治六年の十一月二十九日に、皇后陛下(昭憲皇太后陛下)が、はじめて此の学校に行啓あらせられ、女生徒の学習の有様を御覧になりました。さうして、一同に、「西国立志篇」といふ其頃新刊の書物を一部づゝ、又、年長で英語の出来るものには、小形の英語辞書を添へて御下賜になりました。³¹⁾

天皇や皇后が学校に出向くことは、学校というものが、近代的教育機関としての国家的権威を持つものであることを人々に示したものであると思われるが、その際に優秀生徒に『西国立志編』が下賜されたという事実は、人々の間に国家的テキストとしての『西国立志編』のイメージを焼き付けることとなったはずである³²⁾。

また、明治八年十一月二十九日、東京女子師範学校の開校式の模様を、『明治天皇紀』巻六十三は次のように記録している。

皇后乃ち宮内大輔万里小路博房・同少輔杉孫七郎・典侍高倉壽子・権掌侍税所敦子等を随へ、午前九時同校に行啓あらせらる、便殿に於て文部大輔田中不二麿・同校摂理中村正直及び教員等に調を賜ひ式場に臨ませらる、正直進みて教則等を捧呈するや、之れを受けたまひて御詞を賜ふ、(中略)次に正直・不二麿及び文部省中督学野村素介・同島山義成・訓導棚橋絢の祝辞あり、畢りて教諭及び生徒が生理書・勸善訓蒙・立志編・国史攬要を講ずるを聴きたまふ

皇后が臨席する式典において、校長であった中村正直らの祝辞に引き続き講ぜられたのは、ほかもない『西国立志編』であった³³⁾。明治七年の講書始で加藤弘之が『西国立志編』を進講した際

にも、「皇后同座あらせらる」とあったように、皇后にとっても『西国立志編』は馴染みの深いテキストとなっていたのであり、新たな女子教育の幕開けの場で、皇后を前にしてそれが講読されたことは、前の事例と同様に、この書の権威を人々に如実に示すことになったはずである。

5

木版刷り和装本全十一冊として刊行されていた『西国立志編』が、このように明治の社会に広がりを見せる中で、明治十年には、改訂版である活版洋装本一冊の『改正西国立志編』が刊行される。初刊本と思われる架蔵本には、扉に「板権免許明治十年二月 木平譲蔵板」、奥付に「明治九年十月廿四日 板権免許／訳者 中村正直／東京第四大区三小区小石川江戸川町甲十七番地／出版人 木平譲／同区同町乙十七番地」とある。また、最後のページには「出版所 東京小石川江戸川町十七番地 同人社／印刷所 弥左衛門町 秀英舎」とあり、東京を中心とする二十六の書肆が名を連ねている³⁴⁾。

同じ書籍に二つの版権免許取得年月(日)が掲載されており、はたして正確にはいつ刊行されたのかと迷ってしまうが、田中葉の『「西国立志編」探書録』および浅岡邦雄の『「西国立志編」をめぐる出版事情』には、それに関する調査結果が報告されている³⁵⁾。それによると、①『版権書目』第二号(明治十年二月二十日刊行)の明治九年十月分の項に、木平譲および中村正直を版権者として『校正西国立志編』大本十一冊の版権取得の記載があること、②『版権書目』第三号(明治十年十月十二日刊行)の明治十年一月一六月分の項に、こちらも同じく木平譲および中村正直を版権者として『改正西国立志編』西洋形・小本一冊の版権取得の記載があること、③明治十年四月十七日の『朝野新聞』および『東京日日新聞』に、『改正西国立志編』一冊洋本仕立を「四月下旬ヨリ発売」との広告が掲載されていることが指摘されている。

これらのことからすると、扉の「明治十年二月」

は、活版洋装本一冊である『改正西国立志編』の版権取得月、奥付の「明治九年十月廿四日」は、旧版である木版刷り和装本全十一冊の版権取得日として理解してよいようである。また、明治十年四月十七日付の新聞広告の通りに事が運んだとすれば、『改正西国立志編』の刊行開始は、明治十年四月下旬ということになる。

なお、当時の新聞をあらためて調べてみたところ、『西国立志編』に関する次のような記事および広告を見つけることができた。

中村敬字先生の西国立志編が一たび世に出てから大きに日本国中人民の心を振起し人は勉強勞苦の功を積に非ざれば何事も成し得ざる者と云ふことが余ほど人心に染み込み真の国益と成りたる書物で五座り升が此頃また江戸川町の同人社に於て活字板の新本が出来ると申します旧本には少々誤謬も有りまた人名などの漢字も改めて適當の字音を用ひて遠からず成版にする積りなれども先づ差当り三千部だけ活版にて出来ると申すこと実に有益の書物ゆゑ読む人の沢山に有る程が宜しう五座り升

(明治九年十月二十五日『東京日日新聞』)

中村敬字先生訳述／○西国立志編 一名自助論 全部再版 十月廿四日板権免許／右ハ今般先生自カラ補正シテ活字版ニテ全部一冊ニ纏メ西洋仕立ニ致シ来ル十二月ニハ必ラズ発売スベシ然ルニ此頃或ル書肆ニテ旧本ノ儘ヲ活字版西洋仕立ニテ発売セントスル者アル事ヲ伝聞セリ先生ノ補正セラル、本ニハ「スマイス第一壹板ノ序アリ是旧本ニ無キトコロナリ江湖ノ諸君子請フ正本發行ノ日ヲ待テ購求セラルベシ／印刷所 秀英社／書林 山中市兵衛／同 丸屋善七／同 小林新兵衛／同 青山清吉／同 高橋金十郎

(明治九年十一月七日『東京日日新聞』)

中村敬字先生訳／○改正西国立志編 一冊／

洋本仕立定価金二円／右ハ携帯ノ便利ノ為ニ
一冊トシ改正スル所アレトモ旧本ニ比スレバ
増加スル所アリ当四月下旬ヨリ発売致シ候間
各地ノ書肆ニ於テ購求アランヲ冀フ／但シ
公私学校ニ於テ購求スル分ハ部数ノ多少ニ応
ジ割引致シ候事／明治十年四月／東京小石川
江戸川町十七番地 同人社／版權免許 木平
讓

(明治十年四月十七日『東京日日新聞』)

中村敬字先生訳／西国立志編 合巻八冊 定
価金一円／這回学校所用ノ為メ合本ニ為シ生
徒ノ購求シ安カラシム欲シ価ヲ廉ニシ発売ス
左ノ書肆ニ就テ注文アランコトヲ乞／小石川
同人社邸内 小平源二／通二丁目 稲田佐兵
衛／同 同 愛吉／小石川大門町 青山清吉
／神田新石町 福田仙蔵／神田鍛冶町 高橋
金十郎

(明治十三年七月十日『東京日日新聞』)

これらの新聞記事や広告から、①明治九年の時点で、『西国立志編』は、「日本国中人民の心を振起し」た、「真の国益と成りたる書物」であり「実に有益の書物」であると評されていたこと、②『改正西国立志編』の刊行前に、「或る書肆」が「日本の儘を活字版西洋仕立」にして刊行しようとしたらしいこと、③『改正西国立志編』は刊行当初から、「公私学校ニ於テ購求スル分」については定価の二円からいくらかを割引いて販売していたらしいこと、④『改正西国立志編』の刊行後、明治十三年の時点で、旧版（木版）による『西国立志編』を合巻八冊とし、定価一円で学校向けに廉価販売していたことなどがわかる。

①の「日本国中人民」「国益」といった表現は、前節で明らかにしたように、『西国立志編』が国家的権威と結び付いて人々の間に浸透していたことを彷彿とさせる。また、③および④については、『西国立志編』の流通が、いかに学校教育と深い関係にあったかを裏付けるものとなろう。

明治九年十一月七日の『東京日日新聞』に掲載

された②の件については、すでに真相が判明しており、前掲の田中および浅岡の報告から事情を知ることができる³⁶⁾。それによると、新聞記事の中の「或る書肆」とは、山城屋政吉こと稲田政吉が営む奎章閣を指しているとのこと。奎章閣版の『西国立志編』は実際に活版洋装本一冊の形で刊行されており、浅岡の論文には、その扉と奥付の写しも掲載されている³⁷⁾。奎章閣版の奥付には「明治九年九月十四日御届／明治九年十一月八日出板」とあり、確かに『改正西国立志編』を出し抜く形で刊行されたことは明らかなようだ³⁸⁾。すると、奎章閣版は法を犯した海賊版なのかということ、そうも言えないようである。というのは、先に確認した通り、木平讓および中村正直が旧版の『西国立志編』の版權を取得したのは明治九年十月（おそらく二十四日）だったのであり、奎章閣が出版の届けをした時点では、中村たちはまだ版權を持っていたはずである。つまり、奎章閣版は合法的に刊行されたということになる。また、浅岡によると、「奎章閣版は無版權であるため、複数の書肆が翻刻本を出版することが可能であり」、実際に「明治一四年以後、一〇を越える版元から『西国立志編』が刊行されて版を重ね」という事態を生じさせる要因にもなったということである³⁹⁾。

なお、浅岡はそこまでは触れてはいないが、浅岡の論文に掲載されている奎章閣版『西国立志編』の奥付⁴⁰⁾には、「定価金一円八十銭」という印が押されている。先程の新聞広告にあったように、『改正西国立志編』の定価が二円であったことを考えると、同じ活版洋装本でありながら割安な奎章閣版は、読者の目には魅力的に映ったに違いない。おそらく、山城屋政吉（稲田政吉）は、そこまで見越してこの価格設定を行ったのではなかろうか。山城屋政吉のやり方を倫理にもとる行為だと非難することもできるが、視点を変えれば、活版化の進む明治十年頃の出版業界は、それほど激しい競争の中にあっただとも考えられる。売り上げの期待できる『西国立志編』は、出版業を営む者にとっては、ぜひとも手掛けたい商品だったのである。

6

『西国立志編』は、近代的な学校教育制度に組み込まれる形で広範囲に流通すると同時に、明治初年代の日本において、国民的テキストともいえる地位を獲得していた。そしてさらに、『改正西国立志編』が刊行される明治十年頃になると、活版化によってそれまで以上に発行部数を増やすことが可能になると同時に、新たに発達してきた新聞というメディアによっても着実に読者を獲得し、さらに販売部数を伸ばしつつあったといえよう。度々の引用となるが、石井の前掲書には、次のようなエピソードが載せられている⁴¹⁾。

当時、佐久間貞一氏あり、旧幕臣にして、今活版業を営めり。然るに其業甚だ売れずして、客の至る者無く、益々悲酸の境に沈淪し、家運朝夕を測られず。是に於て、先生に乞ふに、救済の道を授けられんことを以てせり。恰も『改正立志編』の成れる時なりしかば、先生即ち其の印刷を命じたりしに、随て刷出すれば随て売り切れ、版を重ぬること無数、仕事常に絶えずして、家運漸く復活せり。後年、佐久間氏の管したる府下最大の活版所株式会社秀英舎は、実にこの小活版所の後身にして、佐久間氏亦、実業界に雄飛し、工場問題界有数の紳士たりし。

佐久間貞一とは、現在の大日本印刷の創業者であり、中村が『改正西国立志編』の印刷を命じた活版印刷所とは、当時佐久間が営んでいた秀英社（大日本印刷の前身）を指す。『改正西国立志編』の好調な売れ行きが、佐久間に成功への転機を与えたということである。

このように、少なくとも明治十年代の半ば頃までは膨大な読者を獲得していた『西国立志編』であったが、冒頭で見たように、明治二十年代の半ば頃には、すでに同時代的な意義を失い、過去のものになってしまう。そこにはどのような理由が隠されているのか。最後にこの点を考察して本稿

のまとめとしたい。

まず、大きな理由として考えられるのは、明治政府の教育に対する方針が大きく転換したということである。前出「修身教科書総解説」には、その状況が次のように記述されている⁴²⁾。

明治十二年夏の教育についての聖旨は、学制以来の小学校修身教授に対して基本方針の改革を要請した。聖旨のうち『教学大旨』は教育全体についての基本となる方針を示したものであるが、そのなかには祖宗以来の訓典によって仁義忠孝の教を明らかにすること、道德の学は孔子を主とし、人々が誠実であって品行を尊ぶように教育することなどが記されている。（中略）明治十三年十二月に改正された教育令が公布される際に、元老院の修正によって、修身が読書・習字の前に置かれるように特別な取扱をうけている。これは仁義忠孝を基本として教学を立て直そうと要請している聖旨に基くものであることはいうまでもない。（中略）このようにして新しい学科となった修身において求められた授業は、どのようなものであったのかは、明治十四年五月に公布された小学校教則綱領において明らかにされている。（中略）修身教材については欧米の道德を主とした傾向を改め、日本或は東洋の道德を基本とする方針によって編集されねばならないと方向が指示されている。

明治十二年の夏に示された、いわゆる「教学聖旨」を発端として、政府の教育に対する方針が、これまでの欧米を手本としたものから、「仁義忠孝の教」を中心とするものへと大きく転換する⁴³⁾。明治十三年の改正教育令、そして明治十四年の小学校教則綱領は、その転換された教育方針に基づいて作成され、教育現場を徐々に拘束していったと考えられる。そして、当然、教科書に対しても政府による管理が厳しく行われるようになる。

明治五年以来の方針によって出版されてい

た修身教科書については、明治十三年に内容にわたっての調査が行われ、望ましくない内容の教科書は使用できないようにする方法がとられた。明治十三年から取調を開始し、同年八月から数回にわたって望ましくない教科書名を掲げて指示した。その際に国の安寧を害し、よい風俗を乱す内容のある教科書又は一般に小学校における教科書として内容が不適当であると認められたものを処置する方針が明らかにされている。⁴⁶⁾

小学校教則綱領の公布とともに、文部省は小学校の教科書の届出制を実施し、それはさらに明治十六年の認可制度、明治十九年の検定制度へと進んでいく。*Self-Help* の翻訳書である『西国立志編』が、このような教育の変化の中で、どのような憂き目に遭ったかは容易に想像できる。

また、教科書を管理するという明治政府の教育政策には、「仁義忠孝の教」を徹底するといった方針とともに、別の政治的意味合いも含まれていた。それは、「国の安寧を害」するもの、つまり、自由民権を主張したり共和的な政治を肯定するものを排除しようとする意図である。

実際、このような政策は中村の著作を直撃したようで、中村は明治十五年三月十三日の日記に次のように書き記している⁴⁵⁾。

品行論可刪、如左。／一冊 五十八章／五冊
八章／〃 十章／〃 十一章／拾 廿二章／
十一 八章／〃 九章／〃 十章／〃 四十
一章／〃 四十三章

立志編可刪、如左。／一編 二章／〃 九章
／二 十二章／三 全ク削ル 三全章／四
二十一章／五 十一章／十一 十七章／十三
二十一章

以上文部省改正ノ削ニ当ル、今次愛媛県官ノ
請ニ因リ、刪所ノ書ヲ以テ、遂ニ將ニ諸県
ニ公布セントス。

これは、中村が『西洋品行論』と『西国立志編』

において、部分的な削除を余儀なくされたことの記録である。明治初年代には、国家的権威とも結び付きながら人々の間に広がり、国民的テキストとも呼ぶべき存在となっていた『西国立志編』だが、今度は逆に国家的な政策の中でテキストの削除を余儀なくされる。

思えば、明治七年一月七日の講書始において、明治天皇に『西国立志編』を進講したのは加藤弘之であった⁴⁶⁾。しかし、その加藤は、明治十四年、天賦人權説に基づいて書かれた初期の三部作『立憲政体略』（慶応四年）⁴⁷⁾、『真政大意』（明治三年）⁴⁸⁾、『国体新論』（明治七年）⁴⁹⁾を自ら絶版にした上で、明治十五年十月、新たに『人權新説』を刊行⁵⁰⁾し、天賦人權は妄想に過ぎないと論じることとなる。日本が国家としての体裁を維持しようとする中で、この時期、社会は大きな転換期を迎えようとしていた。そして、その大きな流れが、『西国立志編』をも呑み込もうとしていたのは明らかであろう。

博文館蔵版を始めとして、『西国立志編』が、この後も様々な形で出版され続けたのは事実である。では、明治期後半から大正にかけて、どのような意味を持って『西国立志編』は社会に受け入れられたのか。本稿ではそこまでを論じる余裕はないが、それがもはや、同時代的な意義を持つベストセラーとしての出版でなかったことは確かにはずである。

注

- 1) 初刊本『西国立志編』第一冊の扉裏には、「Professor Nakamura/With H W Freeland's/Kind Regards.」と読める英文筆記体の献辞が模刻され、その下に、「戊辰四月余去倫敦時弗理蘭德君以此書原本見贈巻首題此三行乃其手書也今模写付刻俾子孫永莫忘其所自云／中村正直識」と記されている。このことから、『西国立志編』の原本となった *Self-Help* は、中村が明治元（1868）年ロンドンを離れる際に H.W.Freeland なる人物から贈呈されたものであることがわかる。なお、H.W.Freeland については、藤井泰「中村正直に *Self-Help* を贈った人物—フリーランドとは誰か—」（日本英学史学会『英学史研究』第25号、1992, pp. 15—23）に詳しい経歴が紹介されている。

- 2) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク—中村正

- 直と『西国立志編』一』名古屋大学出版会, 2006, p. 5
- 3) 渡部昇一「中村正直とサミュエル・スマイルズ」(講談社学術文庫『西国立志編』, 1991, p. 546) にも, 「当時の日本で総計百万部は出たといわれるほどの売れ行きを示した」との記述がある。
- 4) 石井研堂『自助的人物典型中村正直伝』成功雑誌社, 1907, p. 66
- 5) 富山房百科文庫『西国立志編』, 1938, 「解説」 pp. 15-16
- 6) 文末に「明治廿七年六月博文館創業第七週年之日 門人 大橋新太郎謹識」と記されている。なお, 本文の引用は架蔵本に拠った。
- 7) 大久保利謙「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述及び刊行について—若干の新史料の紹介とその検討—」(立教大学史学会『史苑』第26巻第2・3号, 1966, pp. (153)-(178))
- 8) 静岡県立中央図書館「デジタル英文庫」で確認。
- 9) 注7に同じ。p. (177)。
- 10) 注8に同じ。
- 11) 扉は, 前掲の早稲田大学蔵本および静岡県立中央図書館英文庫蔵本と同じ。
- 12) 早稲田大学所蔵の写本(「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」で確認)に拠った。この写本には, 巻末に朱書きで「右之本書ハ一枚摺リ也当正月ノ新彫にして江戸ニハ未タ多分も有間敷との事故写之ヲして本書ハ江戸ヘ送り遣スもの也/松下庵主人」と記されている。静岡県立中央図書館には一枚刷りの原本が所蔵されているが筆者未見。
- 13) 注4に同じ。p. 64。
- 14) 注7に同じ。p. (175)。
- 15) 注4に同じ。p. 65-66。
- 16) 注4に同じ。pp. 79-82。高橋昌郎『中村敬字』(吉川弘文館, 1966, pp. 115-116) にも詳しい記述がある。なお, 静岡県立中央図書館英文庫蔵『西国立志編』には, 本文でも言及したように「明治三庚午年十二月/同人社蔵版」との奥付がある。このことから, 「同人社」の名称は静岡にいた時から使用されていたことがわかる。
- 17) 注4に同じ。p. 82。
- 18) 初刊本『自由之理』には, 表紙裏に「一千八百七十年倫敦出版 英国 彌爾著」「明治壬申二月発兌」(「明治壬申」は明治五年), 扉に「明治辛未初冬新刻」(「明治辛未」は明治四年)と記されており, 刊行は明治五年二月であったことがわかる。
- 19) 注4に同じ。p. 65。
- 20) 『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身(三)』講談社, 1962, p. 576
- 21) 注20に同じ。pp. 571-572。
- 22) 国文学研究資料館編『明治の出版文化』臨川書
- 店, 2002, p. 40。なお, 後注には, ここでもとにした『甲府新聞』が, 明治6年10月17日付の45号であることが記されている。
- 23) 『明治天皇紀』巻五十九には, 明治八年一月四日, 内務大丞・林友幸の上奏の中に「人口は五年の三千三百十一万八千二百二十五人より六年の増加すること十八万八千六十二人」との記載がある。また, 同じく文部大輔・田中不二麿が「方今教育の概況」について上奏した中に, 「小学の教員二万五千五百三十一人」, 「小学生徒の数は百二十九万七千六百十二人(男子九十八万七千七百九十七人, 女子三十一万四千四百十五人)に及ぶ, 之れを全国の人口に照較するに大約二十四分の一にして, 人口百人に四人一七なり」との記載がある(『明治天皇紀 第三』吉川弘文館, 1969, p. 376-377)。
- 24) 『明治天皇紀 第三』吉川弘文館, 1969, p. 6
- 25) 注24に同じ。p. 186。
- 26) 『明治天皇紀 第二』吉川弘文館, 1969, p. 367
- 27) 注26に同じ。p. 525。
- 28) 注26に同じ。p. 624。
- 29) 注26に同じ。p. 624。
- 30) 注24に同じ。p. 169。
- 31) 蘆谷蘆村『穂積歌子』禾恵会, 1934, pp. 60-62
- 32) 『東京大学百年史 通史一』(1984, pp. 690-691) には, 「工部大学校の場合, 各期末毎の各科目の成績優秀者には, ほとんどの場合担当教師の署名入りの書籍や学用品が賞品として与えられた。(中略) /実際の賞品としては, 明治九年度の例では, 予科終了時の第一席者には, Encyclopaedia Britanica が, 第二席者には Dictionary of Engineering が賞与されたといわれ, また, 歴代卒業生中でも屈指の優等生の名が高い, 志田林三郎や田辺朔郎は授賞の常連で, それぞれの遺品の中の多数の賞与書籍には, 折から『西国立志篇』と訳されてベストセラーであったスマイルズの Self-help など含まれている」との記述がある。
- 33) このときのことは, 山川菊栄『おんな二代の記』(平凡社, 1972, p. 38) にも, 「主席で入学した千世が進み出て『勸善訓蒙』という漢文の本の中の慈母の教えという一章の講義をして退き, ついで吉川若菜さんが『西国立志篇』の一部, 古市洛さんが何やらで, 生徒代表の三人の御前講演は終わりました」と記されている。
- 34) 「東京 日本橋通堂町目 須原屋茂兵衛/同 芝三島町 和泉屋市兵衛/同 小石川大門町 雁金屋清吉/同 日本橋通二町目 山城屋佐兵衛/同 神田鍛冶町 富士屋金十郎/同 横山町二丁目 岩本屋弥兵衛/同 横山町三丁目 和泉屋金右衛門/同 本石町二丁目 梶屋喜兵衛/同 麹町四町目 磯部屋太郎兵衛/同 本町三丁目 瑞穂屋卯三郎/同 神田須田町 和泉

- 屋勘右衛門／横浜 弁天通二丁目 丸屋善八／静岡 江川町 本屋市蔵／東京 日本橋通三丁目 丸屋善七／同 日本橋通二丁目 小林新兵衛／同 尾張町二丁目 明教書肆／同 大伝馬町一丁目 袋屋亀次郎／同 馬喰町二丁目 島村利助／同 南伝馬町 近江屋半七／同 通新石町 雁金屋支店／同 浅草北東仲町 浅倉屋久兵衛／同 室町三丁目 紀伊国屋源兵衛／同 本町二丁目 紀伊国屋梅二郎／同 通三丁目 長門屋亀七／同 外神田末広町 待師堂／大坂 心斎橋南久宝寺町 伊丹屋善兵衛」
- 35) 田中栞『『西国立志編』探書録 連載9～水平譲版と七書屋版の発行時期』（『叢書月刊』2002年12月号, pp. 56-58）。浅岡邦雄『『西国立志編』をめぐる出版事情』（『書籍文化史』第5号, 2004, pp. 10-17）。
- 36) 田中栞『『西国立志編』探書録 連載10～奎章閣版の謎』（『叢書月刊』2003年1月号, pp. 56-58）。浅岡については注35に同じ。
- 37) 注35の浅岡論文に同じ。p. 13。
- 38) 『改正西国立志編』の刊行が遅れた理由は、表紙に用いる板紙（芯紙）の国産化にこだわり、その製造に時間がかかったためと推測できる。この点については、田中栞『『西国立志編』探書録 連載11～「国産初？」の板紙、世界初の成分分析へ』（『叢書月刊』2003年2月号, pp. 54-56）、同じく『『西国立志編』探書録 最終回～表紙板紙と本文用紙の分析結果』（『叢書月刊』2003年3月号, pp. 62-64）に貴重な報告がある。
- 39) 注35の浅岡論文に同じ。p. 14, p. 16。
- 40) 注37に同じ。
- 41) 注4に同じ。p. 67。
- 42) 注20に同じ。p. 583-584。
- 43) 山川菊栄『おんな二代の記』（平凡社, 1972, p. 58）は、明治十三年六月、東京女子師範学校の摂理が中村正直から福羽美静に交替した際の状況について、「反動化した明治政府が中村先生のあとにこの人をもってきたのは偶然でなく、きのうまでの「男女同権」、「独立自主」のスローガンは「女は女らしく」ときりかえられ、『西国立志篇』は『女大学』に変わり、生徒に小倉袴をぬがせて大きな帯をしょわせ、高島田、薄化粧で礼式のけいこをさせるようになり、創立当時の趣意とは逆の方向に楫がとられました」と記述している。
- 44) 注20に同じ。p. 585。
- 45) 高橋昌郎『中村敬字』吉川弘文館, 1966, pp. 215-216
- 46) 注25に同じ。
- 47) 初刊本『立憲政体略』の「小引」には、「慶応四年戊辰七月 加藤弘蔵誌」と記されている。
- 48) 初刊本『真政大意』上の表紙裏には、「明治庚午七月／加藤弘之講述／真政大意全二冊」（「明治庚午」は明治三年）と記されている。
- 49) 初刊本『国体新論』の表紙裏には、「明治七年十二月官許」と記されている。
- 50) 初刊本『人権新説』の奥付には、「明治十五年九月十三日版權免許／全 十月出版」と記されている。